

第36回 日本神経治療学会学術集会市民公開講座

# 「パーキンソン病を知る、行動する、乗り越えるセミナー」が開催されました



第36回日本神経治療学会学術集会(2018年11月23日～25日、東京都江東区)期間中の11月25日、同学会とアツヴィ合同会社の共催で、市民公開講座「パーキンソン病を知る、行動する、乗り越えるセミナー」が開催されました。セミナーでは、本学術集會会長である獨協医科大学教授の平田幸一先生の「楽しむことも治療に結び付く」という開会のあいさつの後、大阪大学教授の望月秀樹先生の「パーキンソン病の薬物治療と最新治療について」の講演、そして順天堂大学教授の服部信孝先生とシンガーソングライターの樋口了一さんによるトークショー「病気になってもあきらめない、意欲を失わない生き方」があり、締めくくりに樋口さんのミニコンサートが行われました。



平田 幸一先生

会場は、患者さんや家族の方が多数参加され、講演やトークショーでは、メモを取るなど熱心に聞き入っておられる姿が印象的でした。また、ミニコンサートでは、「手紙～親愛なる子供たちへ～」ほか3曲が披露され、最後は会場全員の拍手となり、樋口さんと会場が一体となって楽しんでおられる様子がうかがえました。

## パーキンソン病の 症状・原因と最近の治療法

—望月 秀樹先生講演



### ●パーキンソン病とはどんな病気か

パーキンソン病は、10万人あたり120人から130人が罹る病気で、今から100年ほど前にこの病気を初めて報告したイギリスのジェームス・パーキンソン医師にちなんでその名がつけられました。通常は60歳から80歳の間に症状が出るのが多いのですが、中には40代で症状がでる場合もあります。主な症状は、体の動きが悪くなる「無動」、何もしていないでいる(安静・静止)時に手がふるえる「振戦」、体がこわばる「筋強剛」などで、運動症状と呼ばれます。

パーキンソン病の運動症状は、脳の中脳の黒質にあるドパミン神経細胞が減少し、そこでつくられるドパミンの量が少なくなることにより起こります。ドパミンは神経伝達物質の1つで、私たちが体を動かそうとするときには、大脳の内にある線条体という部分から体を動かすための信号が全身に送られて

います。その信号を調節して、身体の動きをスムーズにしているのがドパミンです。そのためドパミンが不足すると運動調節が上手くいかなくなるのです。

黒質の神経細胞の数は、健康な人でも年を取るにしたがって少なくなりますが、パーキンソン病の患者さんはこのスピードが通常より速くなっていると考えられます。しかし、なぜ減少するのかは、完全には分かっていません。われわれ医師は、どうして神経細胞が減少するのか、どうしたら減少スピードを正常にできるのかなどを研究して、よりよいパーキンソン病の治療方法を開発したいと考えています。



望月 秀樹先生

## ●症状を軽くするための治療法

パーキンソン病を完全に治癒させる治療法はまだありませんが、不足したドパミンをL-ドパという薬で補うことによって、運動症状を改善し、日常生活の質を保つことが期待できます。

L-ドパは、今日でも治療効果が高いお薬であるといわれていますが、病気が進んで「進行期」になると、1日のうちで薬の効かない時間帯や薬が効き過ぎてしまう時間帯が出てきます。そして薬が効きすぎてしまう時間帯には、体が勝手に動いてしまうジスキネジア(不随意運動)などの運動合併症と呼ばれる困った症状が出てくることがあります。

このような症状ができるだけ出にくくするために、ドパミンの分解を遅らせる成分とL-ドパを1つの薬にした合剤や、脳内のドパミン受容体を刺激することによって不足したドパミンの働きを補うドパミンアゴニストという薬を徐放剤や貼り薬として投与する薬物療法が行われています。また、専用ポンプとチューブを使って薬剤の吸収部位である小腸に直接持続的にL-ドパを送り届けるL-ドパ持続経腸療法や、手術により脳の深いところに細い電線を挿入し電気信号(パルス)を送ることによって脳を刺激し症状の改善をはかる脳深部刺激療法(DBS)などの、デバイス補助療法(DAT)と呼ばれる治療法も運動合併症を出にくくするために行われています。

## ●これからの治療の可能性

パーキンソン病の原因は分からないことが多く、根本的な治療方法はまだ開発されていません。しかし最近では、iPS細胞の移植や脳の神経細胞を減らす原因を取り除く核酸療法といった、パーキンソン病の進行そのものの抑制を目的とした新しい治療法の研究が行われていますので、希望を持って新しい治療法が使える日を待ちたいと思います。

## あきらめず、そして意欲をもって病気と付き合う

—服部 信孝先生・樋口 了—さん  
トークショー



望月先生の講演の後、服部先生と樋口さんのトークショーに移りました。お二人は主治医と患者さんの間柄ですが、長いお付き合いから服部先生が「友人でもあり同志でもある関係」と言われるように、息の合ったトークに、会場からも拍手や笑い声があがりました。

## ●早期の診断がむずかしいパーキンソン病

樋口さんは、2007年に右手に違和感が出たため、四十肩だろうと思いカイロプラクティックや整形外科に行って

みたものの、典型的な症状の振戦がなかったため、はっきりした診断がつかずにいるうちに、右足が踏み出しにくくなったそうです。体の右側ばかりに症状が出るため、樋口さんは「神経の病気ではないか」と疑い、新しく病院を受診しました。そして、新しく受診した病院で、「自分はパーキンソン病だ

と思うので、検査をしてもらって訳にはいきませんか」と医師に話して、心筋シンチグラフィ検査でようやくパーキンソン病と診断されたそうです。自覚症状が出てから2年後の2009年のことでした。これを受けて服部先生から、「早期のパーキンソン病は、診断が難しいこともあり、確定診断まで長くかかる方もいらっしゃいます。また、樋口さんのように、最初は整形外科や整体に行かれたり、中には精神科に行かれる方もいらっしゃいます」と、早い段階の診断の難しさについて説明がありました。

服部 信孝先生

## ●患者さんと医師の信頼関係も大切

樋口さんが、「医師の方が疲れているのが分かるので遠慮してしまい、自分からは詳しい質問をしにくいことがあります」と、診察の時に質問をためらってしまうと打ち明けると、服部先生は、「確かに海外出張後などで疲れている時に、患者さんの方から『先生、お大事に』などと言われてしまうこともあります。私たち医師は疲れを表に出さないよう気をつけながら、患者さんが感じる壁を取ってあげないといけませんね」と応えました。樋口さんは、「患者さんが医師を気遣うのは、信頼関係ができている証拠で、病気の治療には大事なことだと思います。そうすれば聞きにくいことも聞け、また自分の症状や考えを包み隠さずに話せるようになりますから」と、患者さんと医師の信頼関係の大切さに触れました。

樋口 了一さん

## ●あきらめず、意欲をもって病気と付き合うには

パーキンソン病は、長く付き合う病気なので、前向きに生活すること、あきらめずに治療に取り組むことが重要です。

樋口さんは、「ポジティブシンキングは大切ですが、それにこだわりすぎると、かえってネガティブになってしまいそうです。私も、以前なら1時間でできていたことが3日間かけないとできないといったことにぶつかり、イライラすることもあります。そんな時は、“もう一人の私が私のそばからいつも見ている”と考えて、自分を客観的に見るようにしています。そのうえで、“では自分が今できることは何だろう”と考えるようにしています」と、自分を客観的に見つめることが、あきらめずに病気と付き合ううえで必要だと話します。

最後に服部先生は、「最近では、運動機能とやる気、モチベーションが関係しているのではないかとされています。モチベーションを上げることや楽しいと思えることは重要なので、いつもでなくて良いので、ご家族から優しい言葉をかけてあげることも良いと思います」と述べられました。また、「介護でご家族が疲れることもあると思います。そのような時には、ショートステイを利用するなど、介護保険をうまく使うことを検討されれば良いと思います。それが患者さんやご家族があきらめずに意欲をもって治療を続けられるポイントになるでしょう」と話し、トークショーを締めくくりました。

注) 樋口さんは、「手紙～親愛なる子供たちへ～」などの名曲で知られるシンガーソングライターです。2007年にパーキンソン病の症状を自覚して以来、音楽活動を続けながら長く病気と付き合っています。